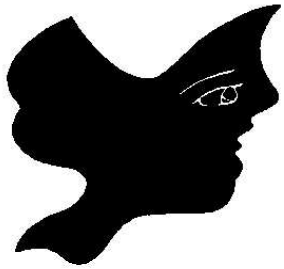
修復できるものとできないもの

世の中には修復できるものとできないものがあります。対象が物である場合，まず技術的に復元できるかどうかという問題があります。もう一つはその物が持つ価値を復元できるかどうかという問題です。

きょう，生徒は美術館で催されている『ポーラコレクション』を鑑賞してきました。作者には，ピカソ，ルノワール，梅原龍三郎とあります。その芸術的価値は正直言って私にはわかりませんが，美術の授業やメディアを通しては聞き覚えのある名前です。現実的な話で申し訳ありませんが，売買するとすれば１作品，億の単位で取引されるそうです。

さて，ピカソのシルベット・ダビットという作品はガラスショーケースの中に展示してあります。このガラスケースを誤って誰かが割ってしまったとしましょう。きっと美術館から修理代が請求されるでしょう。支払いはともかくとしてガラスケースそのものはガラス屋さんの技術によって修復できるでしょう。ところが，さらに奥にあるピカソの作品にまで被害が及んだとしましょう。作品の価値を技術のみで修復することは不可能です。



本日，生徒に失敗がなくてほっとしています。

では，物ではなくて心や気持ち，あるいは言葉の修復はどうでしょうか。

先日の体育祭では前年度職員や地域の方からお志をいただきました。お顔を見る機会があれば校長がお礼を言うのは当然のことです。さて，数日後お志の方と同席する会合がありまして，「体育祭の折りにはお志をいただきましてありがとうございました」とていねいにお礼を申し上げました。…が，何となく相手の表情に明るい反応がありません。理由はしばらくして判明しました。お志は別人の同姓の方からのもので，私が勘違いをして誤ってお礼を言ってしまったのです。さて，この場合どのように修復すべきでしょうか。「先日のお礼は間違いですので，お礼は言わなかったことにしてください」というのも変ですね。かといって「お礼を言ってしまったのですから，お志をお願いします」と言うのはこちらの身勝手です。

ごく日本人的に「アハッ，礼言うたけど，あれ間違い。ごめん，ごめん，アハハハハ」と笑うのがベストでしょうか。名案をお待ちします。

お礼を言われた方が，もしこの記事をお読みでしたら私の心情をお察しいただきまして紙面によりご容赦いただければ幸いです。